令和5年度第三者評価 改善状況報告書

令和6年3月31日

施設名	港区立特別養護老人ホームサン・サン赤坂	施設所管課	保健福祉支援部 高齢者支援課
所在地	港区赤坂6-6-14	指定管理者	社会福祉法人 東京聖労院

改善すべき指摘内容等	対応事業者 (共同事業者の場合記入)	令和6年3月までの改善状況等 (指定管理者記入欄)	令和6年4月以降の取組予定 (指定管理者記入欄)	所管課確認欄 (施設所管課記入欄)
<p>事業所では、毎年策定する事業計画の中で、重点目標や具体的な指標として各種目標数値を示している。計画目標の管理手法として、職員間で情報を共有し、効率的に確認したいとのニーズがあり、ICT化の促進を求める声が多かった。また、介護サービス全体の質の向上と法人独自の各種データ管理の効率化を図るために、クラウド版介護支援ソフトを導入しているが、これらのシステムを効果的に活用することで、ペーパーレス化・DX化を進展させ、管理業務・付随業務等の負荷軽減時間の多くを、本来の介護サービス業務へ振り替えていくことが望ましい。</p>		<p>令和5年11月から介護記録ソフトほのぼのNEXTを導入した。11月にセットアップ作業が開始され、12月は操作説明会がスタートしている。令和6年1月下旬からは特養にてケース記録を試験的にほのぼので入力を開始した。iPadを13台導入することにより、スタッフルーム以外の場面でも入力が可能とした。令和5年8月からはインカムも導入しており、これまでメモで渡していた情報も瞬時に職員間で共有ができる環境も整えている。</p>	<p>令和6年4月から、これまで各部署ごとに作成していた日誌を、施設全体の日誌としてほのぼのNEXTで作成を行い(自動取り込み)、電子印をシステム内で行うことで、プリントアウトを行わずに処理することが出来るようになる。 また、事故報告書についてもほのぼのNEXT内で作成することができるため、基本的にプリントアウトせず作成することになる。 事務連絡につでるので、周知事項や各職員への個別のアプローチもほのぼのを活用していく。</p>	<p>新たなシステムを導入したことで、業務上の情報の管理や共有を、複数人で同時に、効率的に行うことができる体制を導入した点を評価する。現行の取り組みを維持すると共に、個人情報等の管理の面からも利用者が安心して利用できる体制を維持すること、ICT化により更なる業務負担の軽減を進めるよう、指導していく。</p>
<p>利用者の状態は様々であり、職員は看取りケアや認知症ケアへの専門性を高めている。一方で、日常的な楽しみやレクリエーションという点では、より個別に焦点を当てた取り組みを充実していくことも必要と思われる。普段、あまり主張しない利用者もあり、利用者各自が日中をどのように過ごしたいか、個別のニーズを把握し、それに合った活動を提供していくことが望ましい。例えば、他施設の取り組みを参考にして活動の充実を目指すなど、外部に目を向けた研修や事例検討を行い、サービスの充実に活かすことが望ましい。</p>		<p>利用者のレクリエーションや行事については、新型コロナウイルスの影響でクラスターを予防するため、規模を縮小して実施していた。令和5年度については、新型コロナウイルスが5類に分類された事により、ボランティアの受け入れを以前より緩和し、歌の会、大正琴、リフレクソロジーなどを再開した。今後も世間の感染状況や施設での感染状況を鑑みながらとなるが、新型コロナウイルス感染症の流行する前の状態に少しずつ戻していきたいと考えている。</p>	<p>令和6年度については、家族の面会などもフロアに上がっていただき、実施することとしている。実施時間や受け入れ件数などまだまだ縛りがあるが、徐々に感染予防のための制限は緩和傾向にある。ボランティアの受け入れについても、今後、傾聴、車椅子清掃、書道、ネイル、歌謡ショーなどの受け入れをする予定。また、納涼祭(夏祭り)についても令和6年度は、前年度より更に規模を拡大して実施する予定のため、利用者の付き添いなどもご家族やボランティアをお願いしていく方向で検討している。家族やボランティア、地域の方々、以前のように入所してこれる環境を整備することで、ご利用者の楽しみを今以上に提供していきたいと考えている。</p>	<p>コロナウイルス感染対策に気を配りながらも事業を拡充し、入所者や利用者、その家族のニーズを把握しながら、今以上に楽しめる体制での運営ができるよう、指導していく。</p>
<p>新型コロナウイルス感染症の流行や、最近のインフルエンザの流行を踏まえ、感染予防の観点から地域の方々との交流を制限している。外出支援はまだ積極的には行っておらず、外食支援も行っていない。しかし、地域の商店から食事をテイクアウトして外食の気分は味わってもらっている。コロナ禍前には様々なボランティアが利用者支援に来ていたが、現在は少人数の活動からお願いしている。同じ建物内の児童館からの子どもの訪問も、少しずつ再開し始めている。今後、感染症の状況を見ながら、コロナ禍以前のような地域との活発な交流が望ましい。</p>		<p>令和5年度については、新型コロナウイルス感染症対応強化に努めた。令和4年度は大規模なクラスターが施設内で発生したことにより、大きな影響を利用者にも経営的にも受けた。令和5年度については、発生は0ではなかったが、大規模なクラスターを起こさずに運営することができた。この前提で、ボランティアについても5名以内のグループでの活動について受け入れをしている。 納涼祭では、児童の子供たちが施設フロアに上がってもらい、ご利用者と共にゲームを楽しんだ。外食会・茶話会ではご利用者から要望を伺いケーキやハンバーガー・お寿司等を職員が買いに行き、別室にて少人数で楽しんだ。また、1階で行っているりんたろうカフェから、注文したものをフロアに配達してもらうようにし、フロアにて喫茶室を利用してもらうことが可能となった。 サン・サン赤坂では、児童高齢委員会を開催しており、毎月児童交流についての検討を行い、子供たちとの交流の機会を増やしていった。</p>	<p>令和6年度については、ボランティアの受け入れ人数を1グループ5名以内から10名以内へと受け入れ人数を増やし、演奏・歌・園芸等のボランティア受け入れを少しずつ増やしていく予定。 また、納涼祭の開催方法を1階フロア全体を使用して開催することとしている。以前のような大規模な納涼祭に戻すことはすぐには出来ないと考えているが、感染症対策を行いながら、新しい形の納涼祭を作っていきたいと考えている。 利用者の外出機会として、1時間程度であれば、家族と一緒に外出してもらうことを可能としたので、感染状況を確認しながら、施設内での外出行事も少しずつ再開させたいと考えている。</p>	<p>ボランティアや児童との交流の機会を、コロナ前の状態に向けて徐々に拡充し、現状の中でも入所者や利用者が生活を楽しむことができる機会を創出してきたことは評価する。今後は、外出の機会を増やし、更なる交流の機会や行事を再開できるよう指導していく。</p>